

個性化教育の更なる前進をめざして

全国個性化教育研究連盟会長 加藤 幸次

全個連が20周年を迎えた。染田屋前会長、永地正直中国個研会長とともに全個連を立ち上げたのは、“ついこの前のこと”のように思えます。長いようで、ほんとうに、短い気がします。それだけ、全個連の使命が“緊急で、かつ、充実したもの”であったのでしょうか。一気にここまで来た気がします。私たちの旗印は決して色あせるものではありません。それは、一口で言って、「子ども中心」の個性化教育です。子どもたち一人ひとりの個性を生かし、育てることこそ、文化国家を創造する原動力である、と信じてきているのです。子どもは私たちの“未来であり希望”です。教師として、個性化教育に携われることを誇りに思っています。

思い返してみると、最初の頃は概して順風に恵まれた出航でした。新しい風を象徴したのは「オープン・スペース」をもった学校でした。80年代から90年代にかけて次々と建てられていきました。私たちはこの新しい風に乗って、子どもたち一人ひとりが学習活動の「主人公」になるように授業を解き放ってきました。4間×5間のあの教室空間から解き放つことによって、子どもたちが自主性を身に付けてほしいと願ってきました。そのために、私たちはチームを組んで、子どもたちのために「学習の手引き」を開発してきました。「オープン・スペース」には子どもたちの学習活動を刺激し、促進する「学習環境」を用意してきました。こうして創り出された学習活動は子どもたちが「主人公」であると呼ぶのにふさわしいものであり、伝統的な教室空間での学習活動では“なしえないもの”でした。「教師が教える教育」から「子どもが学ぶ教育」への転換をめざしてきた、と言い換えてもいいでしょう。

嬉しいことに、やがて、どの学校にも空き教室が生じ、学級定数も40人になり、コンピュータに代表されるように教育機器が充実し、私たちのめざす「子ども中心」の個性化教育が市民権を得るようになって来ました。オープン・

スペース、ティーム・ティーチング、学習の手引き、学習環境といった私たちのキーワードが一般化しました。また、伝統的な授業に代わって、新しい授業・学習形態、例えば、自由進度学習、課題選択学習、自由課題選択という言葉も一般化しました。私たちの業績です。

しかし、この数年、風は逆から吹き荒れています。「学力低下」や「学力向上」といわれる逆風です。しかも、算数・数学、英語、国語といった用具等教科だけが突出して強調され、再び、教師は黒板と教卓の前に立ち、子どもたちに指示を連発する姿になってきてしまっていないか、と心配です。

20年を経て私たちの運動は岐路にさしかかっているように思います。逆風に怯むことなく、皆で協力し合って「子ども中心」の個性化教育をさらに進展させたいと思っています。幸いにして、全国に志を同じくする教師たちが増えていきます。近年、東海、関西、九州にある個性化教育研究会に加えて、中国と四国に個性化教育研究会が発足しました。この夏休みだけでも、関個研は7月31日に、中国個研は8月2日に、九州個研は9月11日に研究大会を行っています。もちろん、全個連は8月5、6日に研究大会をもちました。「学力低下」や「学力向上」といった表層的な動きに対して、充分対応しうる、地道で、着実な手応えのある実践が報告され喜んでいきます。時間はかかっても、優れた実践で勝負する以外に道はないと思います。

それぞれの研究会の事務局とともに、東京の事務局会もしっかり機能してきています。感謝です。日本の学校改革の「旗手」であることを誇りに思い、一人ひとりの子どもの個性が大切にされる学校づくり、授業づくりにさらに突き進んで行きたいと思っています。新しい「息吹」のようなものを感じているのは私一人ではない、と確信しています。更なる進展を確実なものにしたいと願っています。

学期研究会

「総合的な学習の時間」全体計画の作成 —計画性と子どもの事実、どう折り合いをつけるか?—

【期日】平成16年6月5日(土)

【会場】上智大学6号館 210号室

◎開会行事

◎講演①「ウェビングによる課題作りの再検討」

上智大学教授 加藤 幸次先生

◎講演②「『体験』の教育的意味について」

東京学芸大学教授 浅沼 茂先生

◎実践報告①「千葉県打瀬小学校」

◎実践報告②「神奈川県上小学校」

◎討論

◎全体討論とまとめ

「計画性と子どもの事実、どう折り合いをつけるか?」

◎閉会行事

◎講演①上智大学教授 加藤 幸次先生 「ウェビングによる課題作りの再検討」



総合学習のカリキュラムにおいてどのように課題作りを行なっていくか。テーマは教師が決定する大きな入口であり、課題は子どもが実際に行なっていくものであると規定し、両者の関係を(ア)子どもが課題とテーマを決める型(イ)教師がテーマ・課題作りのほとんどを行なう型(ウ)両者がバランスを取って行なう3つの型に分けた。

(ウ)としてコア・カリキュラムを取り上げた。教師の側から出されたテーマ(コア)と課題との間に問題場面作りを差し込み、課題意識を醸成する。そして、ウェビングによる課題作りを行うことにより学習全体をつかむ。さらに、なぜこの学習をするのか・ここで使う情報源はなにか・どの順番で学習するか

を話し込むことにより、自分たちが主体者になる作業となる。児童を学習の主体者にするには、ウェビング技法をもっと行なう必要がある。(文責加藤 勇)

◎講演②東京学芸大学教授 浅沼 茂先生 「『体験』の教育的意味について」



学習に体験は、なぜ必要か?

このテーマは、簡単なようで実は答えを出すのが大変難しい。なぜ、学習に体験は必要なのですか、と聞くと多くの方はそんなことは当たり前、決まっている

ではないかと言うのではないのでしょうか。ところが、学習には、体験しなくても成り立つものがあるのです。たとえば、計算や文字の学習はどうでしょうか。文字の一字ひともしや計算問題は、斉藤孝流にそれを声に出して呼んだり、書いたりすることが、体を使うことだと言えそうですが、声を出さずに覚えたりすることは、体験なのでしょうか。あるいは、考えるということは体験なのではないでしょうか。

この問題を考えるために、2つのまったく質の異なる体験学習をビデオで検討してみました。ひとつは、空腹体験の学習です。子どもたちは、一泊学校におなかをすかしたまま泊まります。話には聞いたことがある、飢えの体験です。子どもたちは、本当に辛そうでした。話には聞く食料問題を初めて身体で実感するのです。他方、一風変わった体験学習があります。それは、手品をしながら、「だめな自分」に向き合う学習です。マギー司郎のようにこそ先輩は、一見手品の体験学習のようで、実は、心の中にある自分という実体のないものに向き合う学習だったのです。自分に向き合うという課題がこれほど大変で辛いものであったとは、多くの人が創造できなかったのではないのでしょうか。

私は、このように自分に向き合うという学習を「ユーモア詩」の授業の中にも見ました。

このような授業を見た時、私は、体験学習の「体」は、必ずしも「身体」を意味するものでなくても良いのではないかと思ってきました。(浅沼 茂記)

◎実践報告と討論

コーディネーター 立教大学教授

奈須 正裕先生

○実践報告①千葉県打瀬小学校



『内容を吟味し、見直しをもったカリキュラムの作成』(打瀬小の実践発表)

総合的な学習のカリキュラムの作成と見直しや修正については、まず実践後に目標に照らして子どもたちの育ちがどうであったかということを中心

に単元評価を行う。その結果をもとにそれぞれの単元を修正し、次年度の最初に行われる総合的な学習の引継ぎの時に伝えておく。それぞれの学年では、それをもとに目の前の子どもたちの実態や思い、担当教師の思いや願いを入れながら、その年度の年間計画を作っていく。

どんなに優れた単元であっても、毎年踏襲していただければ、合わない部分や無理が生じてきて、それが学習内容の質の低下を招きかねない。今までの良いところを生かしつつその時の子どもたちや教師の思いや個性を生かして全体を見通した総合的な学習の計画を作成していくことが、内容の充実した総合的な学習に繋がっていくのだと感じた。

(文責 田島)

○実践報告②神奈川県上小学校

上小の報告は「まずはじめに子どもありき」として能動的学習者として子ども達を見取り評価していることを前提として実践していることが述べられてた。そして、四十八瀬川にかかわり子ども達が、友達の見解も自分ごととしてとらえていることの報告が行われた。

特筆すべきは、一単位時間内の見取り評価について報告者が修士論文に書いた、エスノグラフィックをもとに詳細に報告された。2

人の対象児童を中心に、子どもの側から見ても教師の側から見ても意味のある活動がどの様に事実として見取れるかに焦点があてられ両者より意味深く見取れる場面や言動等子ども達の意味正解について私見が述べられた。

討論されたことの一つとして、フランダースはカリキュラムは教師の共有化の道具であり実際は子どもがやっていくことがカリキュラムであり、日記やその子の語り、その子の行動も含め学習の文責が大切な評価につながる。(文責 高瀬)



◎全体討論とまとめ

「計画性と子どもの事実、どう折り合いをつけるか」

上智大学教授

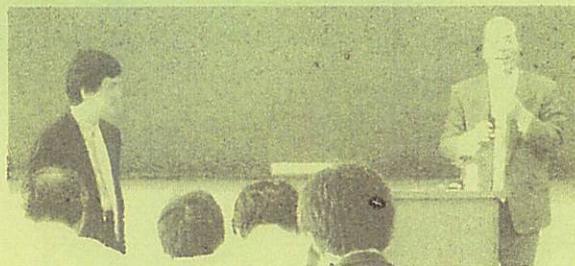
加藤 幸次先生

東京学芸大学教授

浅沼 茂先生

立教大学教授

奈須 正裕先生



午後は加藤先生と奈須先生から今日の実践発表を基に、子どもの見取り・児童理解について講話された。

まず加藤先生から、主に緒川小で行われていた授業分析について、その難しさと同時に分析は即ち児童理解であったことをうかがった。加藤先生を中心に全個連は、「学習形態を自由に作る」研究を重ね、授業の思想を変える一つの切り札となってきた。

形態を変えることが目的ではなく、形態が変わることで授業の「質」が変わり・選択が変わるのだと言う点から、奈須先生が話をとなげられた。個別に子どもの思いをふくらまして活動している時、その思いに教師はスト

ーリーを重ねられているのだろうか。あえて「できない・見取りは難しい」と思えばこそ、そのためのステップ・フィードバック・計画性と事実のつきあわせについて、より研究を（本研修会のように）深め、伝え、続けることが大切だとまとめられた。

とにかくまず授業を見ると、遠目に見て「なんかよく動いているなー」ではなく「背中まわってその子の経験の中（ストーリー）に入っていく」ことが大事だということ力を説かれた。（文責 加藤 久美子）

夏季研修会

「個に応じた指導」と「総合的な学習」で
実現する個性化教育の新展開

～学習指導要領一部改正に

どう対応するか？～

【期日】平成16年8月5日（木）
6日（金）

【会場】上智大学7号館14F

【8月5日】

◎開会行事

◎「幼少一貫の総合学習のカリキュラム」

兵庫県口吉川幼小 塗 雅子先生
河邑 幸子先生

◎パネルディスカッション・質疑応答

コーディネーター
立教大学教授 奈須 正裕先生

◎「小中学校の連携をはかった総合学習」

佐賀県川登中 田島 隆一先生
佐賀大附属小 片淵 文徳先生
「多摩辺中学校の総合学習」
東京都多摩辺中学校 小玉 容子先生

◎パネルディスカッション・質疑応答

コーディネーター
東京学芸大学教授 浅沼 茂先生

◎第1日の質疑とまとめ

立教大学教授 奈須 正裕先生
東京学芸大学教授 浅沼 茂先生

【8月6日】

◎「少人数・習熟度別授業の実際と課題」

東京都小池小 東 照代先生
筑波大学駒場中 草開 宣晶先生

◎パネルディスカッション・質疑応答

コーディネーター

上智大学教授 加藤 幸次先生

◎講演

「緒川小学校における実践を踏まえて」
愛知県片葩小校長 成田 幸夫先生

◎講演

「個に応じた指導の課題」
国立教育政策研究所初中教育研究部長
高浦 勝義先生

◎閉会行事

【第1日 8月5日】

◎「幼少一貫の総合学習のカリキュラム」

兵庫県口吉川幼小 塗 雅子先生
河邑 幸子先生

◎パネルディスカッション 質疑応答

コーディネーター
立教大学教授 奈須 正裕先生



「楽しんで学ぶ」から「学びを深めていく」へ。今夏の研修会は、兵庫県からの幼小連携の実践発表で始まった。経験単元による「みなぎのコース」は、子どもたちの発達の事実に沿って、内容系列を作り修正をかけて年々改善されている。その基となっているのは、「もとになっている子どもの姿の具体文」である。我々が「考察」として普段書いている数行文とは「質」がちがう。この文を書いている今はまさにアテネオリンピックの真っ只中。歴史に残るであろう記録とメダルラッシュの要因は、「基本に戻る」だそうだ。体操選手の足の伸び・ラストに強かった水泳・女子マラソン・レスリング等々。省みるに我々教師にとって「基礎基本」とは何だろうか。

コーディネーターの奈須先生のおさらいポイント①カリキュラム開発（単元）の力 ②発達の事実に沿った授業作りの力 ③事実をもとに修正していく力とはいえないだろう

か。口吉川小（河邑・塗先生）の5歳から7年間を見通した活動（1年生おめでとう他）から子どもたちの「ようし やってみよう」の声が聞こえてきそうだった。

（文責 加藤 久美子）

◎「小中学校の連携をはかった総合学習」

佐賀県川登中 田島 隆一先生

佐賀大附属小 片淵 文徳先生

「多摩辺中学校の総合学習」

東京都多摩辺中学校 小玉 容子先生

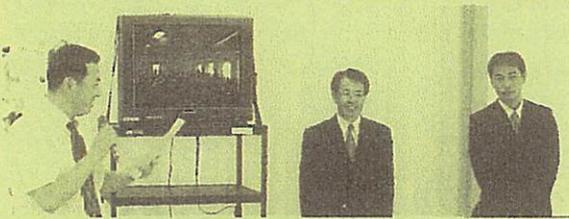
◎パネルディスカッション 質疑応答

コーディネーター

東京学芸大学教授 浅沼 茂先生

総合学習では、小・中という長いスパンでプランを考えることが、重要であるが、なかなかそのような実践例を目にする機会がない。今回の夏季研修会では、小中学校の連携というテーマで佐賀県の佐賀大学文化教育学部附属小の片淵先生と武雄市立川登中学校の田島先生から貴重な実践報告をいただいた。

本実践の特徴は郷土学習の教材化という点であろう。片淵実践では、地域のお年寄りと関わることで、子ども達とお年寄りの相互作用が起り、そこから学びの深まりにつながることを意図している。田島実践では、「郷土川登から」をテーマに、町づくりや伝統芸能、職場体験など題材を地域に求め、子ども達が積極的に地域と関わるような活動を行っている。「自分たちの住む郷土」という柱を



一つ設けることで、子どもの立場からは、郷土への思いの深まりが見られ、教師の立場からは、小・中という長いスパンでのカリキュラム作りができることで、総合の深まりが得られるという好例であった。

パネルディスカッションでは、フロアから、小・中の連携という問題意識を持てば、同じ土俵で話ができるのではないかと。幼・小・中の文化の違いによって、総合の受け入れ方の

度合いがちがうのではないかとというような鋭い指摘があった。（文責 中田）

◎「多摩辺中学校の総合学習」

東京都多摩辺中学校 小玉 容子先生

◎パネルディスカッション 質疑応答

コーディネーター

東京学芸大学教授 浅沼 茂先生



「総合は面白くない」から「学びたくなる総合」への転換を目指し、中学校生活3年間を見通した7つのプロジェクトを「総合的な学習の時間」で編成し実践を行った。2年生から3年生にかけて行った特別企画プロジェクト「今を生きる人に学ぶ」の単元では、

長島選手との出会いからスポーツアナを志したフリーアナウンサー、元プロボクサーの和菓子職人など、仕事に生き甲斐をもって生きている人を教室に招き、話を聞いたり様々な体験学習を行った。また移動教室や修学旅行も総合の内容と連動させ、たくさんの出会いと質の高い体験によって生徒と教師が感動を共有する場面を積み重ねた。3年生では、地域に関わる活動を重視した「MYファイナル研究—15歳の決意—」という卒業研究の単元を実施した。「オリジナル和菓子づくり」に挑戦した生徒たちは、受験の時期にもかかわらず、「今を生きる～」で出会った和菓子職人の店に通い新作和菓子を開発、校内で販売を実現させ収益金を地域の福祉施設に寄付した。そして高校への進学を果たしている。（文責 佐野）

【第2日 8月6日】

◎「少人数 習熟度別授業の実際と課題」

東京都小池小 東 照代先生

筑波大学駒場中 草開 宣晶先生

◎パネルディスカッション 質疑応答

コーディネーター

上智大学教授 加藤 幸次先生

小池小学校では、児童の習熟や理解の程度



興味・関心に個人差があるため、学習活動に適した少人数指導を取り入れ、個人差に応じ習熟度別体験的な授業実践を発表した。数学的な考え方を育てる上で成果が上がっている。大変参考になる実践事例であった。成果が上がったのは小集団にしたからか、授業の工夫からかなどの質問があった。単元の中で、多様な考えを出したい時は、一斉授業。深めたい時には、習熟度別の小集団での授業と目的に応じて学習集団を作るなど工夫していた。

駒沢中では、数学の授業の充実感・成就感を味わわせるために学級を2分割し、1クラスを2人の教師、学年を2～3人で習熟の程度を含むコース編成の学習指導を行っている。この形態を行うための流れや解決しなければならない様々な課題について詳しく発表した。生徒が教材を見てコースを選択し、小集団で学習するので、自分のペースでじっくりできるのでよいなどと、生徒の支持を得て成果を上げている。習熟度別では、自分の力を客観的に見る力がついてくるという感想をもった。

(文責 馬瀬)

◎講演

「今、もういちど『願いの原点』の確認を」
愛知県片葩小学校長 成田 幸夫先生

個別化・個性化教育で実践してきた T・T や加配教員、総合学習、少人数指導などが学校の中に入って来たが、これをさらに進めよう

〈事務局への問い合わせ・連絡先〉
〒115-0031 東京都台東区千束 4-29-5-1005
tel/fax03-3871-8789 庶務部長 高瀬雄二
e-mail yujitaro@yahoo.co.jp
全個連ホームページ
<http://www.ns-da.com/aaa/zenkoren/index.html>



とするものにとって現状は必ずしも順風では学校創りや願いの見える学校行事創り・具体例をだすスクール・プランナーとして活動・分析的に子どもを見て授業を行なうためのパッケージ学習を行なった。これからは個をとらえた教科の個別的な学びの復権を行なうと共に、「学力も学習力も」考え「より豊かな学び」と結ばれた。

(文責 加藤 勇)

◎講演

「個に応じた指導の課題」
国立教育政策研究所初中教育研究部長
高浦 勝義先生

中教審答申で学習指導要領の基準性の明確化・総合的な学習の時間と個に応じた指導の充実がいわれた。少人数指導などによる「きめ細やかな指導」として個に応じた指導や T・T がある。ただ人数を少なくした少人数の一斉指導は意味がなく、指導方法を変えなければならない。個に応じた指導は個人差に応じた指導であり、習熟別学習・完全習得学習・はげみ学習などがある。習熟別学習や算数科のみ行なえばよいと思うのは危険である。

また、この指導は全員が同じ学習することが前提にあるので、補充的な学習や発展的な学習は注意が必要である。教科の学習は少人数指導で行なうので「少人数学級」という言葉は使わない。総合的な学習の時間を充実するためには、学習指導要領の各教科にあるような目標・内容を各学校で決め、教科書レベルの単元計画を作る必要があると結ばれた。

(文責 加藤 勇)

おかげさまで70号を迎えることができました。これも会員の皆様のおかげと感謝しております。今後ともよろしく願い申し上げます。

全国個性化教育研究連盟 第70記念号
平成16年8月29日発行

編集責任者 事務局長 奈須 正裕
編集 広報部 中田 泰志